

## 書評・紹介

Robert E. Buswell, Jr.,

### *The Formation of Ch'an Ideology in China and Korea: The Vajrasamādhi-Sūtra, a Buddhist Apocryphon*

ロバート・F・ローズ

#### I

過去十数年の間、北米の禅宗史の研究は、多くの若い研究者の出現により、飛躍的に発展した事は周知のところである。例えば、中国禅について言えば、コーネル大学のジョン・マクレイ教授は北宗禅についての大著、*The Northern School and the Formation of Early Ch'an Buddhism* を発表している<sup>①</sup>、スタンフォード大学のバーナード・フォール教授は禅を脱構築する一連の著作を世に送り出している。また日本の禅についても次々と注目すべき研究が出されているが、その中でもスタンフォード大学のカール・ビラフェルト教授による道元禅師の『普勧坐禅儀』の研究は高く評価されている。そのほか多くのアメリカの学者が禅宗の思想と歴史に取り組んでおり、北米の禅研究は新しい時代に入ったという感が深い。

これらの研究者の中でも特に注目されている人が、現在カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (University of California at Los Angeles; UCLA) で教鞭をとられているロバート・E・バズウェル Jr. (Robert E. Buswell, Jr.) 教授である。バズウェル教授は長年の間、韓国で禅の修行を積まれたが、後にカリフォルニア大学バークレイ校 (UC Berkeley) の大学院に入学され、仏教学を学ばれた。すでにバークレイ在学中、韓国の重要な禅僧の知訥についての研究を出版している。これは四〇〇ページ以上にも及ぶ大著であるが、韓国の仏教を始めてアメリカに紹介した書物として、重要な意味をもつものである。また最近、仏教における偽経を扱った論文集の *Chinese Buddhist Apocrypha* を編集し、さらに昨年、韓国の禅宗僧院生活について詳しく研究した *The Zen Monastic Experience: Buddhist Practice in Contemporary Korea* を出版している<sup>②</sup>。そのほかにも、中国や韓国の禅について多くの論文を発表しており、非常に幅広い研究活動を行なっている。<sup>③</sup>

#### II

さてここで取り上げる *The Formation of Ch'an Ideology in China and Korea* は、もともとバズウェル教授がバークレイに提出した PhD 論文を大幅に書き換えて、Princeton University Press から出版したものである。本書は、大正蔵経第九卷法華部に収められている金剛三昧経を扱ったものであり、それは(1)金剛三昧経の作者とその思想的背景について詳しい考

察と、(2)金剛三昧経の英訳により構成されている。その内容を詳しく記載すれば、次のようなものである。

第一部 研究編 (Part One: Study)

第一章 偽経としての金剛三昧経 (The *Vajrasamādhi-Sūtra* as an Apocryphal Scripture)

第二章 新羅学僧の伝記 (The Hagiography of the Korean Scholiast)

第三章 金剛三昧経に見られる仏教教理 (The Doctrinal Teaching of the *Vajrasamādhi*)

第四章 金剛三昧経における禅的要素——この經典の成立についての証拠 (Chan Elements in the *Vajrasamādhi*: Evidence for the Authorship of the *Sūtra*)

第二部 金剛三昧経の英訳 (Translation: The *Vajrasamādhi-sūtra* [Book of Adamantine Absorption])

最後には、中国語・韓国語・日本語・欧米諸国の言語で書かれた金剛三昧経や禅宗史に関する研究書や学術論文の詳しいビブリオグラフィが付記されている。

バズウェル教授が序文で述べているように、第二部に掲載されている金剛三昧経の英訳は、欧米諸国の言語への初めての翻訳であり、そのため特にアメリカやヨーロッパでは重要な意味を持つものである。しかし本書で最も注目される箇所は、第一部の研究編であろう。ここでは金剛三昧経の成立について、いくつかの興味深い見解が示されている。それを要約すれば、次

の二点に納めることができる。

- 1 金剛三昧経は六八六ごろに新羅で成立した經典である。
- 2 その作者は初期禅宗の東山法門に属していたと考えられる。

金剛三昧経は、大正大藏経でいえば、わずか九ページしかない短い教典である。しかし、内容的には非常に豊富であり、水野弘元博士の言葉を借りれば、「南北朝末頃までの中国で問題とせられていた仏教思想が殆どすべてこの教典の中に網羅されている」のである。その中には法華経の一乗三乗の思想、涅槃経の一闡提や仏性説、大乘起信論の如来蔵や本覚始覚説、さらには真諦三蔵に由来する第九阿摩羅識説などを始め、多くの重要な仏教思想が現れており、教理史上、いろいろな問題を提起している。

この教典を取り巻く多くの問題の中で、従来研究者の関心を最も強く引いてきたものの一つが、その真偽の問題であるが、今日では金剛三昧経は中国で作成された偽経であるということが定説となっているように思われる。例えば水野弘元博士は一九五五年に発表された「菩提達磨の二入四行説と金剛三昧経」という論文の中で、金剛三昧経をさまざまな角度から検討され、菩提達磨以降中国で作られた教典であることを論じられている。さらに欧米では、ウォルター・ライベンタール (Walter Liebenthal) 教授も、一九五六年にフランスの学術雑誌 *Young-pao* に発表された「Notes on the *Vajrasamādhi*」の中で、金剛三昧経の偽選説を唱えられている。<sup>⑩</sup>

しかしそれらの見解に対して、本学の木村宣彰助教授は金剛三昧経の新羅撰述説を主張した。彼は一九七六年に「金剛三昧経の真偽問題」と題した論文を『仏教史学研究』（一八号）に掲載し、<sup>①</sup>その中で金剛三昧経が「南北朝から隋唐にかけて重視されたあらゆる教典の所説、各宗の教義学説を殆ど全て網羅している」教典である点に着目して、それは「通仏教的で幅の広い融通無碍な性格を有し、会通を信条とするもので宗派的な対立を嫌う」新羅の仏教界の中で作成されたものであると力説された。<sup>②</sup>

これらの先学の研究を踏まえて、バズウェル教授は金剛三昧経の成立課題について再検討を加えるのであるが、彼の結論からいえば、この経典は新羅でつくられた可能性が非常に高い、というものである。彼が指摘するように、金剛三昧経出現に関する伝説は、明かにその新羅起源を示唆するものである。この伝説は、『宋高僧伝』や『三国遺事』などを始めとするいくつかのテキストの中に納められている新羅の元暁の伝記に見られるものであるが、その内容は次のごとくである。当時の新羅国王の后が病に倒れたので、良薬を求めて使者が唐に派遣された。しかし中国への航海中、波の中から突然老人が現れた。その老人に連れられ、海中の竜宮に案内された使者は竜王に会見した。その会見中、竜王は、新羅王の後の病は、実は使者を竜宮に呼び寄せ、金剛三昧経を新羅に伝える口実にすぎなかったことを述べた。そこで金剛三昧経を授かった使者は本国へ引き返し、この経典を新羅に伝えたが、後に竜王の指示に従って、新羅の

学僧元暁がその注釈を書いた。これがかの有名な『金剛三昧経論』である。

バスウェル教授によると、この伝説は明かに金剛三昧経が新羅で作成されたことを示唆している。実は、先に挙げた水野論文も木村論文も、共にこの伝説に注目しているのである。しかし、水野博士は竜宮を山東半島か、遼東半島かのいずれかを象徴するものであると考え、この伝説は、金剛三昧経が中国で作成され、新羅にもたらされたことを物語るものであると解された。さらに博士はその制作地を新羅とすることは考え難く、その理由として、元暁が金剛三昧経を偽経と見なしていないことを挙げている。つまり、もしこの教典が新羅で作られたものであれば、元暁もそのことを知っているはずであり、詳しい注釈書を書くほどその教典を重視しなかったであろう、というのが博士の見解である。一方、水野博士とは逆に、木村教授はこの逸話をベースにして、金剛三昧経の新羅撰述説を主張した。しかし残念ながら、バズウェル教授も指摘しているように、木村教授はこの伝説以外、この教典の新羅撰述説を裏付ける資料を示していない。つまり教授は金剛三昧経が新羅で誕生した教典であることを確実に立証する証拠を提示していない、とバズウェル教授は言うのである。

そこでバスウェル教授は、金剛三昧経が新羅で成立したという仮説を実証する手がかりとして、中国で編纂された経録に注目する。バスウェル教授によると——これは水野博士や木村教授も指摘していることであるが——経録の中で、金剛三昧経が

始めて現れるのは、三七四年に編纂された釈道安の『綜理衆經目錄』（以下『道安錄』と略称する）である。だが、金剛三昧經は間もなく中国から姿を消してしまったようである。これは『道安錄』以後の經錄が、金剛三昧經を闕訳としていることから明かである。

しかし金剛三昧經は突如として、七三〇年に智昇によって編纂された『開元釈教錄』の中に再び現れるのである。智昇はこの金剛三昧經こそ、『道安錄』以来消失していた經典であると考えていたかも知れないが、それは実は最近（伝説によれば）竜宮から新羅にもたらされた經典のことであった。しかし、バズウェル教授が言うように、ここで重要なことは、この金剛三昧經は、『開元釈教錄』に現れる五〇年前に、すでに新羅に存在していたことである。これは元暁が、その死の直前の六八六年に『金剛三昧經論』を著していることから知られるのである。さらに注目すべきことは、元暁死後の六九五年に中国で作られた『大周刊定衆經目錄』にも金剛三昧經の名が見えない、という点である。これらの点を考えあわせると、新羅で金剛三昧經が流布し、研究されていたにも関わらず、長い間この經典は中国では全く知られていなかったことになる。これは金剛三昧經が六八六年以前に新羅で作られたことを立証するものである、とバズウェル教授は論じている。

### 三

このようにバズウェル教授は金剛三昧經の新羅選述説を主張

するのであるが、次に問題となるのが、この經典が、誰によって、いかなる理由で書かれたのであるか、という点である。この点についても、バズウェル教授は大変興味深い説を提唱している。それは、先にも述べたように、この經典は、初期禪宗史の中で重要な位置を占めていた一派である東山法門に属する人によって作られたものである、というものである。

従来、特に水野弘元博士などによって、金剛三昧經には、初期禪宗独特の教義などが導入されていることが論証されている。その主なものは、(1)初期禪宗で重んじられていた二入四行説と深い関係にある二入説（二入とは理入と行入のこと）と、(2)守一と呼ばれる、特に東山法門で重視された禅法である。このように見ると、金剛三昧經の作者は初期禪宗の教義や実践法に通じていたことが明かである。しかし、バズウェル教授が指摘するように、金剛三昧經の作者はこれらの教義や実践法を無批判に受けいれているのではない。例えば、金剛三昧經の中には二入説を説いている箇所があるが、最終的にそれは分別にもとづくものとして退けられている。しかしそれと対照的に、金剛三昧經は守一を正しく如来禅に入る方法として賛嘆している。おなじ初期禪宗の教義について、なぜこのような、全く反対の見解を金剛三昧經は持つのであろうか。それはこの經典の作者が、守一の禅法を重視した東山法門に深い関わりを持つ人物であったことによるのである、とバズウェル教授は主張するのである。もしそうであれば、金剛三昧經の作者は誰であろうか。それを断定する確実な資料は存在しないことを認めながらも、バズ

ウェル教授は朝鮮半島に始めて禅を伝えたとされている法朗こそ、この経典の作者ではないか、と推測している。法朗は、六三二―六四六の間、新羅から中国に渡った僧である。彼は東山法門の道信に師事したが、六七六年以降新羅に戻り、禅を広めた。このように、法朗は金剛三昧経の作者に必要な条件を全て満たしている。つまり彼は新羅出身の僧侶であり、六八六年ごろには新羅に滞在しており、当時の中国禅、特に東山法門について詳しい知識を持っていた。これらの理由により、バズウェル教授は金剛三昧経の作者を法朗と考え、彼が東山法門の教えを新羅に伝えるために、この経典を作成したのではないかと推定しているのである。

さて、以上のようにバズウェル教授の金剛三昧経成立に関する研究を中心に本書を紹介してきたが、本書にはこのほかにも中国・新羅の初期禅宗に関するさまざまな問題について詳しい説明がなされており、最近の禅宗史を扱う英文の書物の中でも最も興味深いものの一つであるように思える。さらに、第二部に付記されている金剛三昧経の英訳も、スムーズに読める訳であり、欧米の金剛三昧経研究に大きく貢献することが期待される。この金剛三昧経の研究をベースとして、バズウェル教授が今後、『元暁の『金剛三昧経論』』に取り組み、韓国の仏教思想をより一層詳しく解説してくれることを期待する次第である。

Robert E. Buswell, Jr., *The Formation of Chan Ideology in China and Korea: The Vajrasamādhi-Sūtra, a Buddhist*

*Apocryphon*. (Princeton: Princeton University Press, 1987).

# 注

- ① John R. McRae, *The Northern School and the Formation of Early Chan Buddhism*, Studies in East Asian Buddhism, no. 3. Honolulu: University of Hawaii Press, 1986.
- ② Bernard Faure, *The Rhetoric of Immediacy: A Cultural Critique of Chan/Zen Buddhism*, Princeton: Princeton University Press, 1991. *Chan Insights and Oversights*, (Princeton: Princeton University Press 1993).
- ③ Carl Bielefeldt, *Dogen's Manuals of Zen Meditation*, Berkeley: University of California Press, 1988.
- ④ Robert E. Buswell, Jr., ed., *The Korean Approach to Zen: The Collected Works of Chinul*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1983.
- ⑤ Robert E. Buswell, Jr., *Chinese Buddhist Apocrypha*, Honolulu: University of Hawaii Press, 1989. なお、この書は『仏教学ジャーナル』第五五号の中へ、山野俊郎氏によって書評されている。
- ⑥ Robert E. Buswell, Jr., *The Zen Monastic Experience: Buddhist Practice in Contemporary Korea*, Princeton University Press, 1992.
- ⑦ その主なものを挙げる上次のようなものがあ
- ⑧ “Chinul's Systematization of Chinese Meditative Techniques in Korean Son Buddhism,” in *Traditions*

of *Meditation in Chinese Buddhism* ed. by Peter N.

Gregory. Honolulu, University of Hawaii Press, 1986.

- ② "The Short-cut Approach of K'an-hua Meditation: The Evolution of a Practical Subtletism in Chinese Chan Buddhism," in *Sudden and Gradual: Approaches to Enlightenment in Chinese Thought* ed. by Peter N. Gregory. Honolulu, University of Hawaii Press, 1987.
- ③ "Chan Hermeneutics: A Korean View," in *Buddhist Hermeneutics* ed. by Donald S. Lopez. Honolulu,

University of Hawaii Press, 1988.

- ⑧ 水野弘元「菩提達磨の二入四行説と金剛三昧經」『駒沢大学研究紀要』一三号 p. 41.
- ⑨ 水野前論文 pp. 33-57.
- ⑩ Walter Liebenthal, "Notes on the *Vajrasamādhi*," *T'oung-pao* (1956): 348-86.
- ⑪ 木村宣彰「金剛三昧經の真偽問題」『仏教史学研究』一八号 pp. 106-117.
- ⑫ 木村前論文 p. 116.